



Title	＜図書紹介＞『カッコウアザミの歌 楊牧詩集』
Author(s)	上田, 哲二
Citation	大阪大学言語文化学. 2007, 16, p. 192-195
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77879
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

図書紹介

楊牧(著) 上田哲二(編訳)『カッコウアザミの歌 楊牧詩集』 思潮社 2006/3

254p 20cm ISBN コード：4-7837-2865-8

楊牧（本名：王靖獻）氏は1940年に台湾の花蓮で生まれました。花蓮中学に入学し高等部を経て、台中の東海大学で外国文学を専攻。卒業後、金門での兵役を経て渡米しアイオワ大学芸術学の修士、カリフォルニア大学バークレー校で比較文学の博士を取得した研究者でもあります。現在、シアトルのワシントン大学教授。15歳で詩人としてデビューし、初期の筆名である「葉珊」で発表していた時代はロマン主義に影響を受けた抒情詩を中心に発表していましたが、1971年に筆名を「楊牧」に変えて以後、詩作以外でも多彩な手法で散文、戯曲、翻訳等の仕事をしています。作家の聶華苓が楊牧の『葉珊散文集』で序文を書き、以下のように述べています。「私が最も好きなのは、葉珊（楊牧）が半分酔った時である。その時だけ、彼の骨の芯まで野性の収まりきらない血が奔流している詩人を目にする事ができる」。聶華苓は楊牧作品の硬質な文体の裏に潜んだロマン的な野性を見逃していません。詩人の想像力は酒精による喚起によって新たな血流を生み出すようです。ミッシェル・イエも「ロマン主義は楊牧作品の一貫した精神である。いわゆるロマン性は通俗的意味の抒情や、情緒的感性ではない。それは、簡単に言えば、超越する精神である。小我に対して時間に対して不断に超越することであり、永遠に対しての持続的な希望であり、人と宇宙の自然秩序の調和の真髄を理解することである」と指摘しています（奚密「読詩筆記：楊牧」、『聯合文学』192）。楊牧が一貫して挑戦するテーマは時間の流れという、我々人間が抗すことのできないものに対して、「記憶」によって超克しようとすることで、それは近代的な、ある目的を求めて流れる線形の時の流れではなく、円還する流れのなかで起ちあがってくる実在のすがたを求める姿です。さて台湾の本土系詩人、陳千武はご自身の詩について次のように述べています。「私の個人的な詩の出発は、日本の植民地下の一人としての自覚と、（中略）大陸の人びとによる独裁政治、それに抵抗するところにあるのはいうまでもないんですが、それよりもまず、私には生まれながら何ゆえ外省人たちの支配に左右されなければならないのか、という根源的な疑問があるのです」。（「座談会：アジアの現代詩はどこへ向かっているのか」『詩と思想』1992/9月、vol.2）。台湾現代詩は日本の前衛詩運動の洗礼をすでに受けていた日本語世代の流れ、大陸の新文化運動の遺産を継ぐ者達、あるいは台湾民族運動としての左翼運動の流れというように複数の遺産が戦後台湾現代詩の発展の源流となっています。彼らの詩は常に政治との拮抗のなかでその柔軟さと逞し

さをつけてきました。1979年の高雄事件（党外運動への政府弾圧事件）の翌年、鄭炯明が「給独裁者（「独裁者へ送る」）」（『笠』1980/4）という詩篇を発表していますが、同じ頃、楊牧も詩集『禁じられた遊び』（1980）を出してガルシア・ロルカ、フランコ政権の秘密警察といった材料を使い、暗に蒋家国民党を批判した作品を書いています。

階段の前に溜まった去年の冬の枯葉

私たちの心にも何年も前の枯葉が溜まっている

「G線がやっと弾けるようになったわ」と彼女が言う——「ほらね——」

微笑みながら 彼女は薬指で草原のように

グラナダの風を起こした

詩人はドアを開け、通りに出た。昼時の静止した時間

突然一連の銃声が炸裂し、ロルカは

言葉を失ったままそこに倒れた

私が台湾の詩に興味をもちはじめたのは日本の戦前のモダニズム詩を読んでいた頃でした。日本の近代詩の歴史で昭和の初めの超現実主義運動、フォルマリズム運動の重要な一翼を担った集団として当時の満洲と関係していた詩人達があります。当時、満洲には安斎冬衛、北川冬彦といった詩人たちがヨーロッパ、アジア、日本の風景が混在したような大陸の風景に惹かれて集まり、ひとつのモダニズム詩の実験場でした。大連は日本のモダニズム詩の一つの拠点であったし、新京は朝鮮詩人達の拠点でした。朝鮮の詩人達は郷里を離れ、異邦のコスモポリタンの世界で、モダニズム詩をうみだしていましたし、台湾詩人たちは東京で活動していました。川村湊氏（『文学から見る「満洲」：「五族協和」の夢と現実』）が指摘するように彼らの無国籍的で、感覚が崩壊していくようなイメージや現実でない浮遊したオブジェを取り上げたような作品群は国粹主義的思潮の中でひとつの可能性を秘めていました。虚無的な匂いと無国籍的亡命者の性格の現代詩が、満洲という植民地で、しかも戦時下にかかれたことにひとつの反逆の精神を読み取ることもできます。そのような作品の読書と平行したかたちで私は戦後の台湾のモダニズム詩人がおかれていた環境を調べていきました。やがて、両者に興味深い類似点があるように思えてきました。反共プロパガンダと言論統制の厳しい50、60年代の台湾でも西洋からの「横の移植」というスローガンを強調した前衛詩人たちは現実のない無国籍的なテーマを選んでいました。彼らは熱病のように爆発的にひろまったシュールレアリスム等の前衛詩運動を支持し、西洋詩のスタイルに準じた作品を多量に生み出しています。当時の彼らにとっては個の意識であり、思想こそが来たるべき未来であっ

たわけです。戦前の日本のモダニズム詩人たちは結局、ファシズムの軍靴が近づくにつれ、「五族協和」、アジア主義の理想と現実とに破れ、袋小路に追い詰められていきましたが、満洲の詩人たちの置かれていた位置と蒋介石政権下における台湾戦後詩人の状況のあいだには、類似した反逆の匂いを感じられます。それが私の大学院における最初の研究テーマ「詩人と家郷」になっていきました。調べてみると台湾の詩についてはアメリカでさかんに英訳アンソロジーが出ていました。これは台湾出身の研究者がアメリカに多く在住していることもありますが、アメリカの研究者が台湾とのつながりを伝統的に重視していたという理由も考えられます。台湾詩の主な英訳アンソロジーには、オレゴン大の Angela Jung Palandri (榮之穎) さんの先駆的な著書、*Modern Verse From Taiwan* (1972) やカリフォルニア大の Michelle Yeh (奚蜜) さんの *Anthology of Modern Chinese Poetry* (1992) などがありました。2001 年には Green Integer から英訳の台湾の詩人シリーズが出て張錯、席慕蓉、焦桐、陳義芝、許悔之などが訳されています。また日本では、従来日本統治時代の作品か、戦前からの台湾人が母体となった笠詩社（陳千武等）の作品が日本の詩誌で散発的に紹介されてはいました。村野四郎、北原政吉、高橋喜久晴といった方たちのご努力で『詩と思想』、『現代詩手帖』、『地球』といった詩誌がたまに思い出したようにとりあげていました。自費出版に近い形で、日本語訳のアンソロジーも数回出版されています。しかし本格的に流通ルートにのったものではなかったので、なかなか現在では手に入りません。私としては戦後に大量に出たさまざまな詩風の台湾詩が日本でなぜほとんど翻訳もされないのか疑問を感じながらも、少しずつ台湾の本土系詩人である楊牧さんについての修士論文を地味に書き上げました。その後、後期課程に進んだ頃、台湾の政府系資金（文化建設委員会）で台湾詩人のアンソロジーを出す話があり、『台湾現代詩集』（是永駿氏との共訳）が 2002 年に国書刊行会から出版されました。その後、『シリーズ台湾現代詩』（全 3 巻）が出てかなり邦訳で読めるようになっていきます。

日本で知られていない詩人の個人詩集を出すという計画はそれほどスムーズに進んだわけでもありませんでした。資金調達やら、希望にあった出版社は限られていましたが、最終的には思潮社さんが協力してくださいました。著者の楊牧氏から日本語版の個人詩集を出したいという話は以前から伺っていたのですが、本格的に話が進み始めたのは 2004 年に東京大学文学部に講演会に来られて、何年かぶりにお会いしたときです。その時、所長をされていた中央研究院の文哲所に「訪問学人」として一度来ないかという話があり、その年の 11 月に台北で詩集出版の大まかな打ち合わせなどをしました。その後、『現代詩手帖』2005 年 11 月号で講演、作品、私の拙文を載せていただき、少しずつ話がすすみました。日本と台北あるいはシアトルの間でメールや手紙で何度も質問、

協議がつづきました。海外詩は現在の出版市場ではなかなか刊行が難しいものがあるのですが楊牧夫人の夏盈盈さんや洪範書店の葉歩榮氏のご尽力もあり、2006 年春にようやく刊行しました。今回の『カッコウアザミの歌』はいろいろ大変でしたが、著者にも喜んで頂き感慨深いものがありました。なお、思潮社から『台湾現代詩人シリーズ』も始まり今後数年で 10 人程度の詩人が翻訳される予定です。

(上田 哲二)